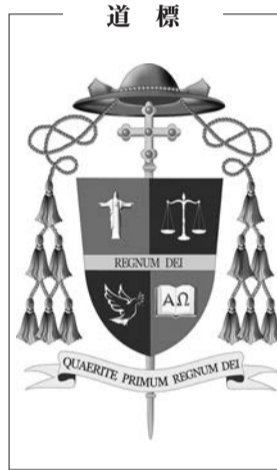




〒892-0841  
鹿兒島市照国町13-42  
カトリック鹿兒島司教区  
電話099 (226) 5100  
振込口座 02030-2-8359  
編集発行 教区広報部  
1部60円年間千共1100円



# 教会の現状と問題点を分かち合う

## 鹿兒島教区シノドス終わる

10月13日(日)、14日(月)の2日間、鹿兒島カトリック・ザビエル教会と教区本部を会場に「鹿兒島教区シノドス」が開催され、出席者で小教区や活動団体の現状や問題点を分かち合った。今後は準備委員会でこのシノドスで出された意見等がまとめられ中野司教に提言される。これを受けた中野司教は2020年の年頭教書で「鹿兒島教区における宣教司牧の基本理念とその方向性」を発表することになる。

テーマに「教会の三つの柱(集まり・交わり・派遣)を生きる」を掲げた鹿兒島教区シノドスには、教区内の全小教区から主任司祭と信徒代表、これに修道者代表と活動団体代表などが加わり、100を超える出席者があった。13日午後3時から始められた教区シノドスでは、末吉卓也神父の開会の挨拶に続いて同シノド



中野司教の挨拶に聞き入る出席者たち

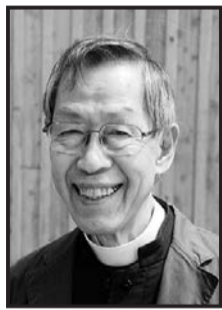
その後、出席者たちは「聖書に親しんでいるか」「班制度が活かされているか」「主日のミサの充実」「外国からの移動・移住者との連携」「若者と教会」「社会との関わり」「教会組織の充実」「高齢者と教会」「家庭と教会」の九つのテーマごとに分科会に入り、熱心な分かち合いを行った。1日目のシ

ノドスはこの分科会で終了(午後7時)し、その後は教会ホールで軽食を取りながら交流し親睦を深めた。翌14日は、昨日からの分科会が継続された後、全体会で各グループからのまとめが発表された。その後は会場を主聖堂に移してささ

## 日常での信仰の充満を願い続け

### 教区の精神的柱として働いた

#### ペトロ 竹山 昭神父帰天



父が9月29日(日)午前3時32分、入院先の病院でうつ血性心不全のため帰天した。78歳だった。1941年3月20日に長崎県北松浦郡佐々町に生まれた竹山神父は、長崎公教神学校、東京カトリック神学院へと進み、1967年7月9日にザビエル教会で

司祭の聖位にあげられた。司祭に叙階された後も上智大学で勉学に励み、1973年に神学博士の学位を取

げられた派遣のミサで締めくくられた。今回の教区シノドスは、

今年1月の司祭会議で開催が発表されたものだが、司祭たちだけで用意されたものではなく、信徒や修道者を加えた準備委員会が組織され、共に知恵を絞りながら開催まで歩んできている。今後、シノドス準備委員会では、「出された意見を無駄にしないよう」反省会と会合を重ね、司教への提言としてまとめられていくという。

得。これまでに鴨池教会、司教館、紫原教会、ザビエル教会で働き、1988年から18年間は司教総代理を務め、故・糸永真一司教を助け、教区司祭団の精神的柱となった。また信徒の信仰養成のために執筆活動、聖書の学習会を続けたほか、27年間もの間「夏期集中講座」を担当した。

▼学校法人聖マリア学園  
9月17日付で泉浩二神父(鴨池教会・聖母幼稚園園長)が理事長

### 修道会便り

▼シスター益子結美  
マリアの宣教者フランシスコ修道会女子種子島修道院のシスター益子が誓願宣立50周年の金祝を迎えた。

### 「短信」

▼宣教日誌講演会  
奄美宣教再開当時を記録したオーバン神父の日記の訳者・松田清四朗神父(コンベンツアル会)が10月15日教区本部で講話し、30人余りが聴講した。

## 司教の手紙

皆様、お元気ででしょうか？

10月開催された「教区シノドス」を終え、私たちは新しい歩みを始めようとしていきます。また今月

月は38年ぶりに教皇様を迎え、日本の教会に新たな息吹をいただくこととなります。そんな中、わたくし自身も司教叙階2年目に入り、間奏仕して下さった竹山神父様が天国に召されました。竹山神父様は、鹿兒島教区いわば屋台骨として働いてくださいました。仮通夜、本通夜、葬儀ミサには2階席も埋まるほどの会葬者がありました。神父様が生前いかに多くの人々と交わり、霊的きずなで結ばれていたかをうかがわせる光景でした。派遣先として鹿

## 中野アカデミー開講

### 鹿兒島教区司教 中野 裕明

者さん方の信仰の養成をことのほか大事に考えていらした神父様でもありました。この神父様のご意向を継続したいという思いが私を駆り立てました。それで、考えたのが「中野アカデミー」開講です。

文章があります。「司教は、信仰の伝達と教育の分野における自分の責任を自覚しています。そうであるならば、司教は、自分の召命と使命から信仰を伝えるよう招かれた人々が、同じ心構えをもつように働きかけなければなりません。ここでいう

成と継続養成の両方に気を配らなければなりません。」(教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告「神の民の牧者」29番)  
開講に際しての具体的な要項は次の通りです。  
名称…「中野アカデミー」(アカデミーとは古代ギリシャ時代に始まる学問振興のための学校。「教区」としないで「中野」としたのは、個人の責任で始めた故)  
開講日…原則として毎週水曜日、19時～21時。(休講日は教区報に掲載。因みに11月20日は休講。)  
対象…基本的には信者。但し、未洗者も歓迎。  
持参する物…「新旧約聖書」「カトリック教会のカテキズム要約」  
参加費…1回500円  
皆様、ごぞつてご参加ください。

# 弔辞 神のみもとに旅立たれた竹山神父様へ

## 共に働けて幸せでした！

司祭団代表 永山 幸弘

今、私たちに深く大きな喪失感と寂しさが満ちています。特に司祭団にとっては、竹山神父様、あなたは大きな存在でした。それは司祭団の良識、知性的にも、識別においても大きな支えだったからです。竹山神父様の落ち着きと安定が大きな力を与えてくれていました。

今年3月、心不全から多機能不全となり重篤な状態だった時に病院を訪問した際、覚悟を決めお別れの言葉をかけました。「神父様と一緒に働いた30年、幸せでした」と。すると神父様は重篤な状態にもかかわらず、かすかな微笑みも返してくれました。それがとても自然な感じで、どんな人生を歩んできたかこんなことができるのだろうかと思議に思うことでした。

ここで神父様と共に働いた期間を振り返ってみたいと思います。1988年4月から2006年の3月までの18年間は、神父様は総代理、私は



サルヴェレジナを歌って葬送する司祭団

また神父様は多くの本を書かれましたが、その中でも司祭評議会名で出した「カトリックの信仰」は名著です。今でもこれ以上のカトリック入門書はないと思います。「信仰は日常の実践の中で発揮されてこそ」という

ザビエル教会の主任司祭でした。この期間は特に教区にとって大きな変わり目になりました。第一に鹿児島教区宣教再開100周年がありました。そしてカテドラル・ザビエル教会と本部棟の建設、聖フランシスコ・ザビエル渡来450周年などが挙げられます。お互いに最善を尽くしました。辛く苦しいこともありましたが、その中でも充実感が溢れていました。だからこそお別れに際して「幸せでした」と伝えることができました。

そしてその際に神父様が返してくださったあの微笑みは、やはり神父様の生き方の表れだったと思わずにいられません。重篤の中で、死に向かう司祭が死を通常のこととして迎えられている。迫り来る死を目前にしながら淡々とされている。「まさに信仰と日常を生き、死をも生きることなのだ」と教えてくださったと思います。これまでどのように生きてきたから、棺の中のお顔も、まさに日常の顔でおられるのだと思います。死に臨んでも変わらなかった神父様に驚かされています。

昨日(9月30日)、修道院にごミサに来てくださった泉神父様が「竹山神父様は不死身だと思っていたのに」と言われたのですが、まったく同感。3月にラザロの現代版とも言える出来事を体験した私たちにとって、「今度もまた竹山神父様はこの危機を切り抜けてくださることだろう」という期待感から、のんきに構えていました。

## 走るべき道を走り尽くした方

教区修道女連盟代表 郡山 康子

内容なっています。これほどのものを40代の時にまとめてくださいました。深いキリスト教の理解があったからこそでしょう。その他にも聖書に親しむ運

動、夏期集中講座、グループでの学習と信者の皆さんに大きなものを与えてくれました。神父様の中には溢れる知的、霊的な泉があったのでしよう。

「竹山神父様ご自身も突然の神様からの呼び出しにびっくりなさったのではありませんか？」と、申し上げるのは、最近洗孔準備の要理を担当され、その方の洗孔式を楽しみにしておられたからです。神様からの呼び出しに神父様は「もう少し時間をください。大切な約束がありますから」とおっしゃったに違いありません。竹山神父様は決して約束を違えるような方ではありませんでしたから。

でも、人知れずささげておられた苦しみ、痛みをすべてご存知の御父は「もう十分だよ。ゆつくり休みなさい。あとのことは私がいいようにしてあげるから、心配しないで」と言われたのでしょうか。そして神父様は、あのマリア様と同じように「なれかし！」と、想像することもで

これまでの神父様のお働きを受け継ぐ私たちにとって、神父様のように「信仰を日常の中で生きる」ようにならなければ、子供に、そして私たちの周りの人に信仰を伝えることはできないのだと確信します。これまで精一杯働かれた神父様、どうか永遠の安息に旅立ってください。

これは「毎日のミサ・別冊、聖週間の復活の八日間」の冊子です。復活の月曜日、火曜日、水曜日の福音の箇所(2000年 Fr.竹山 鹿児島純心聖堂にて)にお話の要点が記されています。内容はあえて公表いたしません。修道院の一人の姉妹と今朝の食事の時に少しだけ分かち合いました。同じ道を歩む同志として、あの静かな口調で切々と語られたお言葉は、私が生きていた限り、毎年、心に響き

## 神父様との出会いに感謝！

信徒代表 柳 正子

「竹山神父様、おはようございます」と挨拶の後、病室のカーテンを全開にし、窓を少し開けると明るい日差しと海からの風が神父様の部屋いっぱいになり広がります。美しい空と青い海、どっしりとした校舎のある景色を眺めるのが神父様は好きでした。

お顔を拭き、うがいをして、柔らかな手にご聖体のイエス様を頂き、ゆつくりと味わっておられましたね。点滴につながれた不自由なお身体で、リウマチからくる痛み、荒い息遣い、体がコチコチに固まって、どうしようもない苦しみをじっと耐えていらっしゃいました。枕辺にはロザリオがあり、眠れない神父様の祈りとなっていました。「退院したらやり残した仕事を

この続きを」との思いで、必死に生きておられました。振り返ると神父様がザビエル幼稚園の園長先生でいらした頃、子育てに悩む私たちのため毎月、祈りと学びの場を設けてくださいました。母親同士、お互いに色々な悩みを打ち明け合い、神父様はそれを静かに聞いて下さる優しいアドバイスを下さってその都度、励ましと勇気をくださいました。ものでもした。その頃からのメンバーの一人、郡山悦子さんの追悼と神父様の52年目の叙階記念を祝って、この7月9日にはごミサをあげていただきました。それが最後のごミサとなりました。とても心に残る嬉しいごミサでした。神父様は前回の入院の際「病室の壁に美しい花が次々

続けるでしょう。

1987年、神父様のザビエル教会主任最後の一年間は月曜日以外毎日、そして司教総代理になられた1988年から約10年間は週4日、カテキスタとして神父様のお側近くで過ごさせていただきました。「康子さんは、私より4か月お姉さん」とおっしゃって、いろいろよくしていただきましたが「私はお姉さんとしてどんなことをしてあげたのかな」と思い起こそうとしても思い当たりません。かえって偉大な弟からたくさんのご指導を学ばせていただきました。本当にありがとうございます。

個人的なことばかり申し上げましたが、実は私は修道女連盟の姉妹たちを代表してお礼を申し上げるためにここに立っているのです。「分かってるよ」という神父様の静

と現れては消えるのを眺めていた」とお話しされていました。大好きな「花咲山」のお話を交えながら…。そして入院中であつても教会のこと、教会学校のこと、病人訪問のことなど心遣いしてくださいました。今は神様の光に包まれておられるのでしょうか。お若い時からたくさん病に見舞われては、静かに受け止め、乗り越えてこられた神父様、いつの時でも忍耐強いお姿で、そして痛みや苦しみを「ご存知だからこそその優しい眼差しで私たちを導いてくださいました。」

3月の重篤な状態からの約半年、ある方にお別れの覚悟のお恵みを、ある方には奇跡のみわざを見せてくださった感謝を、ある方には神様と共にいることの実感を、そして何よりも祈りの力をしみじみと味わわせてくださいました。夏期集中講座で長年にわたり、豊かな学びの機会を

かなお声が微笑みとともに聞こえてきます。竹山神父様、長い間、私たち修道女連盟の指導司祭としてご指導下さいまして、ありがとうございます。いつも穏やかに微笑みを持って接してくださいましたので、安心してなんでも相談できました。心から感謝申し上げます。何よりも嬉しかったのは、今年の6月の総会に、まるで不死鳥のように現れ、しかも立つたまま20分近くお話ししてくださいましたこと。私はお話の内容よりも神父様を拝見して、もう涙でいっぱいになりました。

今度は天国から力強いエールを送ってくださいましたことを信じています。よろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございます。いつの日か、天国でお会いいたしましょう。

9月28日の土曜日は、いつもと様子が違っていました。起き上がる力がありました。寝たままご聖体のイエス様をいただくかれ、朝食はオレンジジュースを一口だけでした。「この2、3日は食欲がない」とおっしゃっていましたが、これでは体が持たない、なんとかして欲しいと切に思うことでした。

10月になったら主聖堂でごミサを共同司式することを目標にされていた神父様、これからはザビエル教会のすべてのミサをご一緒に司式なさることでしょう。神父様、お別れは本当に寂しく辛いですが、神様のもとで憩い安らかにお過ごしください。今までもくださった溢れるばかりの愛、本当にありがとうございます。

神父様と過ごせた幸せな時を神様に感謝いたします。

# 「対等」が生かされる教会になるために

紫原教会主任司祭 山口好信

教区報10月号で川村信三教授(上智大学)の講演内容を一部紹介しました。それは第二バチカン公会議の目指す教会は「過剰な中央集権をやめていくこと、そして聖職者中心の教会から信徒中心の教会へ」というものでした。司祭の言うことにただ従うだけという「受け身の信徒」ではなく、自分の考えや意志を教会の中で活かしていける教会に変わっていかねばならぬという事です。司祭と信徒は対等であることが基本です。今でもそうですが、名前を呼ぶとき「神父様」とか「司教様」と「様」付けで呼ぶ人がまだ多いですね、特に鹿兒島や長崎はそうですね。もうこれは止めにしてしまえんか。世間の人が聞いたら、呆れると思います。

戦前までの日本社会は多分に身分制社会の影響が残っていました。でも昭和憲法の下では、天皇も大臣もわれわれ庶民も、国民である以上は「対等」であり平等です。同

じ人格の尊厳、同じ基本的人権を持っています。日本社会の中でカトリック教会だけが司教や司祭を「様付け」で呼んでいる。まだかつての西洋の封建的・身分制的な意識が残っているからです。西洋中世世界では司教は封建領主であり、その後は都市諸侯だったので聖俗の両権力を持っていました。しかし第二バチカン公会議以後は、教会法でも教皇も司教も一般信徒と同じ基盤の下でのみ奉仕の権限を持つています。

確かに、この世にある教会という集団の秩序維持のために、教会法の第330条からローマ教皇について、第336条から司教団について、司教について第375条からそれぞれ権限(はつきり言えれば権力)が序列に従って規定されています。「見える教会」も世の中の一つの団体にすぎません。しかし司教や司祭が、これら権限・権力を使い損なうと、もはや霊的な感化力を信徒に及ぼすことはで

きないでしょう。また「一応信徒の意見は聞くが、決めるのは司教・司祭である。」これも奉仕から逸脱した力の行使です。パウロの前にも、聖職者によるセクハラが問題になりましたが、その根底にはパウハラがあると私は思っています。ある程度、教会法的に間違いではないでしょうか、こういう力の行使のされ方をすると、誰が教会にとどまり続けるでしょうか。見識ある人は教会を見限つて去るのだらうと思います。またこういう強権の下で信徒は「受け身の信徒」にならざるを得なかったのです。

今、必要なのは原点に戻ってイエスが使徒たちに言われたように、「いちばん上になりたい者は皆の僕になりなさい」(マタイ20・27)です。奉仕のための権限でなければなりません。教会法第375条に「司教は：統治の奉仕者になるように教会の牧者として立てられる」とあります。

あくまで「奉仕者」です。司祭も同じです。行動の主体ではなく、相手の必要に答えていくこと、それが奉仕というものです。

「魂に関することは信徒より司祭のほうが専門だ」と言う人がいますが、それは本当でしょうか。私は大学院で臨床心理学を専攻しましたが、昔は確かに「魂の配慮」は司祭の務めでした。ところが、その仕事は徐々に一般の人つまりカウンセラーや心理学者、精神科医に奪われていったのでした。なぜなら教会の司祭の言うことには限界があるからです。司祭のほうが聖書や神学の知識では上回っているかもしれないが、魂の深い所の問題は神との関係だけではなく多種多様です。また司祭は権威的・権威的の言うからです。司教や司祭はもつと謙虚であるべきでしょう。

その昔、一般信徒は聖書を讀むことを禁じられ、また識字率も低かったため、福音がどういふものかを自分で確認できませんでした。でも現代は違います。自分で聖書を読み、福音とはどういうものか、神の御心は何かを自分で知ることが出来ます。それに同じ問題を抱えていても、そ

幼子の殉教の話は歴史的事実として疑わしい、ということをお話しました。では、なぜ、福音記者マタイはこの話を創作したのでしょうか。

マタイは幼子が殺害されたことを、「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、／慰めてもらおうともしない、／子供たちももういないから。」と(2・18)、エレミヤの預言から一部を引用しました(エレミヤ31・40・1)。そこには、バビロン捕囚にあ

って捕虜となつた者たちが、ラマに集められた後に連行されたことが書かれています。しかし、これに続くエレミヤの言葉は、「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。あなたの未来には希望がある、と主は言われる。」

## 《康由神父の聖書教室(19)》

### 幼子殉教を巡って



息子たちは自分の国に帰って来る。」とあるように(エレミヤ31・16・17)、希望を告げるものであり、「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日がある、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。」とあるように(エレ

ミヤ31・31・32)、神様が新しい契約を結んでくださる、というものです。おそらくマタイは、エレミヤの預言の成就として幼子殉教の話を作ったのでしよう。また、これに併せて、ヘロデ大王がバビロン捕囚を遙かに超える悲惨なことをした、という悪い印象を後代に伝えようとしたと考えられます。私たちにとって、この話は躓きになるかもしれません。いつの時代でも何の罪もない無抵抗な者、力のない者が悲惨な目に遭うものです。しかし、福

れぞれの人に対する神の御心や配慮は異なっています。人によつて性格も器量も行動の仕方も違います。司祭が聖書や神学から一般的かつ理想的な生き方を説くのは簡単なことですが、信徒は複雑な現実の中で、神と自分との関係がどうあるべきかを自分で考え判断しなければならぬのです。そこに司祭が介入する余地はほぼありません。静かに見守るだけでいい。信徒の皆さんが司祭を必要とするのは秘跡の執行と聖書の勉強会くらいかもしれません。

音記者マタイはこうした現実をイエス様の誕生にあたって書こうとしたのではありませぬ。引用しなかつたエレミヤの預言を通じて、どんなことがあっても、その先に希望があることを伝えていけるのです。私たちは救い主であるイエス様がお生まれになったことを信じています。それは神様と私たちとの間で新たな契約が結ばれたことを意味します。であるのなら、私たちの苦しみは神様とイエス様によつて報いられるはずなのです。

- 1日(金) 諸聖人の日
- 2日(土) 死者の日
- 3日(日) 平秀応修道士命日(1994年)
- 4日(月) 死者のためのミサ・名瀬納骨堂前・11時
- 9日(土) 大野和夫神父命日(2016年)
- 10日(日) ラテラン教会の献堂
- 17日(日) メニツヒ神父命日(テヨドル)
- 17日(日) 年間第32主日
- 17日(日) 柳本繁春神父命日(教皇レオ1世)
- 17日(日) ガブリエル神父命日(1978年)
- 17日(日) 年間第33主日
- 17日(日) 聖書週間・24日まで
- 17日(日) 福者レオ税所七右衛門殉教祭・川内教会・13時
- 17日(日) 神修神父命日(2014年)
- 18日(月) 貧しい人々のための世界祈願日
- 18日(月) 司祭評議会・教区本部・14時
- 19日(火) 教区司祭会・教区本部・16時
- 20日(水) コンベンツ・教区本部・10時
- 24日(日) 三木巖神父命日(2000年)
- 24日(日) 王であるキリスト
- 26日(火) 鄭成淙神父命日(ヨハネ・ベルクマンズ)
- 30日(土) 聖アンデレ使徒
- 【司教日程】 2日講演会(東京)、3日死者のためのミサ(唐湊墓地)、4日福岡大神祭、12日大口明光学園理事會、17日レオ七右衛門殉教祭、18日司祭評議会及び教区司祭會、19日コンベンツ、20日大神学院會議(福岡)、23日26日教皇訪日関係
- 【祈禱の使徒會】 祈りの意向
- 世界共通 近東での対話と和解
- 日本の教会 世を去つた人々とその遺族

**+KABAYAN SEKSYON+**  
**Pagsasakultura at ang Eukaristiya**

Sa pagtupad ng kanyang misyon ng ebanghelisasyon sa Asya, kailangang makipag-ugnayan ang Simbahan sa malawak na kaibhan ng mga kultura. Isang malalim na pananaw ang batayan ng tahaking ito: ang pag-usbong ng mga tunay na pamayanan ng pananampalataya sa Asya. Ang mga pamayanang Kristiyano ito ay kailangan magin, ayon sa *Federation of Asian Bishops' Conferences (FABC)*, "Asyano sa takbo ng pag-iisip, pagdarasal, pamumuhay, at sa pagpapahayag ng kanilang sariling karanasang Kristiyano sa iba."

Hindi ikinapipinsala ng Simbahan ang daan ng "pagkakatawang-tao"; sa halip, itinataguyod nito ang tunay na pagiging Katoliko. Gaya ng tinuran ni Papa Francisco: "Kung naunawaan ng wasto, ang pagkakaiba-iba sa kultura ay hindi isang banta sa pagkakaisa ng Simbahan" (Evangeli Gaudium b.117).

Mangyari pa, ang liturhiya at mga sakramento ay gumagamit ng mga kultura na pagpapahayag ng mga tao sa lugar. Sa ganitong paraan, ang pagkakatawang-tao ng Katawan ni Kristo ay nagaganap sa buhay ng ilang mga tao.

Ang liturhiyang isinakultura, paritkular ang Eukaristiya, ay malaki ang maiaambag tungo sa ibayong pag-unlad at tunay ng espiritwalidad para sa mga Asyanong Kristiyano.

Walang duda na sa paglago at ebolusyong ito, ginagabayan ng Espiritu Santo ang mga Simbahan sa Asya na pag-ugnayin ang kultura at pananampalataya. Ito ang natatanging handog ng Asya sa Simbahang pandigdig.

Dito mararanasan ng lahat ng Kristiyano na ang Diyos na sinasamba ay buhay din sa kulturang nakagisnang ng bawat Asyanong Kristiyano, pinapatatag ng pananampalataya.

*Hesus, ang Mukha ng Habag ng Diyos (Fr. Dino Orolfo)*

会と催し 11月

# 奄美宣教再開記念ミサと関連行事に参加して

奄美宣教司牧を考える会 嘉渡教会 恵 輝 久

1947年9月14日、名瀬の船着場に到着した2人の司祭、オーバン神父とフェリクス・レイ神父。喜び合う久保喜助氏や郡山為業氏を中心とする多数の出迎えの信者たち。この日から始まった「奄美宣教再開」を記念するミサが9月15日(日)奄美市の名瀬聖心教会で行われました。

あたかも「講談」のように聞き入ってしまった。内容の豊かさとともに、信仰の先達たちの活躍を目の当たりにするようなお話でした。

講演の後、休憩時間で心を整え、記念ミサです。

中野司教様が奄美でこの記念ミサをなさげようと思われたのは「奄美の信徒の皆さんに元氣になってほしいから」ということ。信徒の減少、教会のメンテナン、価値観の多様化の中、信仰生活を全うすることの難しさ、などなど。

「神の国の建設」はこれらの問題に思い悩み解決を模索するようなことではなく「また教の原理でもなく、一人が回心すれば天は大いに喜ぶようなものである」とこの日の福音を引用しながら、示唆に富む説教をしてくださいました。

続いて場を移しての祝賀会。ここで特筆すべきは余興の寸劇での一コマです。

戦争の足音が近づくと、奄美において神父が不在となるギリギリの時、幼子を抱きかかえた夫婦が神父を探し当て、洗礼を願うシーンです。迫害の中にあっても変わらぬ信仰に対する熱い心、この信仰心こそがそれから13年を経

過した後、宣教再開のために来島したオーバン神父をして「島は小さいかもしれないが、すでに人々の心の大きさを見えています」と語らしたのだと思います。

ここに一冊の本があります。宣教再開の記念ミサの前、数カ月前に増刷され配布された本です。「宣教日誌」レイモンド・オーバン・バルトルド・オス神父(カプチン・フランシスコ会士)記録、松田清四朗神父訳。すでに多くの信徒の皆様がこの本を手に取られ、懐かしくも身近に神父様のご苦労の日々はもとより、行動を共にした先輩方諸氏のお名前や信仰活動に触れ、喜びと感謝の念で読み進められたのではないのでしょうか。

「訳者あとがき」に次のようにあります。

「時の流れの中で培われた信仰をいかに自らの子孫に伝えていくか。私たちが共有する強烈な信仰の追憶は、神の恵みの「しるし」として時間を超えて、色あせることはない」年代を30年という世代でざっと区切ってみますと、宣教創始期から戦前までを初代に含めれば、2代目から3代目が我々の大多数ということになります。世間ではとかく3代目はネガティブなイメージがあります。が、しかし、そのような思いは、祝賀会フィナーレを「六調」で、神父さま方と明るく元氣に踊る皆さんには通用しないように思えます。まるでセピア色の写真に収まる先人の方々からエールを送られているようでした。

オーバン神父とフェリクス・レイ神父は「FS1177号」というアメリカの輸送でんで奄美宣教に來られたと伺い知りました。私たちが神の民として、この神の教えにこたえる旅路に就かなければならないと思えます。

私の勝手な憶測ですが、決して不安な旅ではないと思います。すでに先人たちにより準備は整えられているからです。とはいえ、旅に苦難はつきもの、そこは神に祈りながら、共に助け合いながら乗り切りましょう。目的地は「神の国」。

「神の国の建設」はこれらの問題に思い悩み解決を模索するようなことではなく「また教の原理でもなく、一人が回心すれば天は大いに喜ぶようなものである」とこの日の福音を引用しながら、示唆に富む説教をしてくださいました。

「訳者あとがき」に次のようにあります。

「時の流れの中で培われた信仰をいかに自らの子孫に伝えていくか。私たちが共有する強烈な信仰の追憶は、神の恵みの「しるし」として時間を超えて、色あせることはない」年代を30年という世代でざっと区切ってみますと、宣教創始期から戦前までを初代に含めれば、2代目から3代目が我々の大多数ということになります。世間ではとかく3代目はネガティブなイメージがあります。が、しかし、そのような思いは、祝賀会フィナーレを「六調」で、神父さま方と明るく元氣に踊る皆さんには通用しないように思えます。まるでセピア色の写真に収まる先人の方々からエールを送られているようでした。

オーバン神父とフェリクス・レイ神父は「FS1177号」というアメリカの輸送でんで奄美宣教に來られたと伺い知りました。私たちが神の民として、この神の教えにこたえる旅路に就かなければならないと思えます。

私の勝手な憶測ですが、決して不安な旅ではないと思います。すでに先人たちにより準備は整えられているからです。とはいえ、旅に苦難はつきもの、そこは神に祈りながら、共に助け合いながら乗り切りましょう。目的地は「神の国」。

「わたしのせいじゃない」ということである。最後のページに、泣いていた男の子の姿はない。どこに行つたのだろうか。この絵本には、6枚の写真が収められている。長崎に投下された原爆のキノコ雲、ソマリア難民の子ども、リベリアの少年兵などである。学校内のいじめを扱っているが、社会の問題にも目を向けるためである。

福島第一原発事故について、東京電力の旧経営陣3人が強制起訴された裁判で、9月に無罪判決が言い渡された。旧経営者に対する刑事責任を不問に付すことで、結局誰も責任を取ることなく、フクシマは忘れ去られることになるのだろうか。「わたしにはかんけない」という都合のせいじゃない」という都合の

## KJJP (鹿児島正義と平和協議会) 通信 11月号

今月、教皇フランシスコが来日する。核兵器廃絶のメッセージを発信するとともに東日本大震災の被災者に会うことになっている。原子力を使った技術(核兵器・原子力発電)に対する警告は、わたしたちキリスト者の行動を促すことになるだろう。かつての戦争の責任や福島原発事故の責任も曖昧なまま放置されている「無責任の体系」の国において、わたしたちキリスト者の責任は重大である。

「わたしは、わたしのせいじゃない」ということである。最後のページに、泣いていた男の子の姿はない。どこに行つたのだろうか。この絵本には、6枚の写真が収められている。長崎に投下された原爆のキノコ雲、ソマリア難民の子ども、リベリアの少年兵などである。学校内のいじめを扱っているが、社会の問題にも目を向けるためである。

福島第一原発事故について、東京電力の旧経営陣3人が強制起訴された裁判で、9月に無罪判決が言い渡された。旧経営者に対する刑事責任を不問に付すことで、結局誰も責任を取ることなく、フクシマは忘れ去られることになるのだろうか。「わたしにはかんけない」という都合のせいじゃない」という都合の

「わたしは、わたしのせいじゃない」ということである。最後のページに、泣いていた男の子の姿はない。どこに行つたのだろうか。この絵本には、6枚の写真が収められている。長崎に投下された原爆のキノコ雲、ソマリア難民の子ども、リベリアの少年兵などである。学校内のいじめを扱っているが、社会の問題にも目を向けるためである。

福島第一原発事故について、東京電力の旧経営陣3人が強制起訴された裁判で、9月に無罪判決が言い渡された。旧経営者に対する刑事責任を不問に付すことで、結局誰も責任を取ることなく、フクシマは忘れ去られることになるのだろうか。「わたしにはかんけない」という都合のせいじゃない」という都合の

「わたしは、わたしのせいじゃない」ということである。最後のページに、泣いていた男の子の姿はない。どこに行つたのだろうか。この絵本には、6枚の写真が収められている。長崎に投下された原爆のキノコ雲、ソマリア難民の子ども、リベリアの少年兵などである。学校内のいじめを扱っているが、社会の問題にも目を向けるためである。

「わたしは、わたしのせいじゃない」ということである。最後のページに、泣いていた男の子の姿はない。どこに行つたのだろうか。この絵本には、6枚の写真が収められている。長崎に投下された原爆のキノコ雲、ソマリア難民の子ども、リベリアの少年兵などである。学校内のいじめを扱っているが、社会の問題にも目を向けるためである。



### 福者レオ税所七右衛門 殉教祭

2019年11月17日 (日曜日)

#### プログラム

12:30~13:00 受付

13:00~13:30 セレモニー

13:30~15:00 記念ミサ

(司式: 中野裕明司教)

場所: カトリック川内教会  
主催: カトリック鹿児島司教区  
川内教会レオ殉教祭実行委員会  
問合せ: 薩摩川内市若松町4-7  
Tel.0996 (22) 3738

### 文芸

短歌 市来房枝  
復活祭の記念写真を手に取れば妻の遺影を持つ人のあり

鳴池教会 前田儀子  
珈琲が苦きかをりを立つる宵いまだに心の闇は真深し

ベトナムを旅行された神父さまは、手首につけられるロザリオを購入して来られたのです。いただいた方々は、嬉しそうに手首に付けられています。他の教会の担当になられても、私たちが思いを馳せてくださったことに感謝することでした。

神父さま方がいつまでもお健やかでありますようお祈りいたします。(報告・玉里教会レポーター)

おことわり  
岩崎正幸さんの「ウガンダの旅」はお休みします。

義務を課すにふさわしい「予見可能性」を認めず、「絶対的安全性の確保」を前提にせず、裁判所は責任を免れさせることになるのだろうか。

信仰を持つわたしたちは、人類の創造主である神の前に立ち、道義的・法的・倫理的責任以上の宗教的責任を問われることになるだろう。「わたしには、かんけない」という言葉だけは言いたくない。(紫原教会 山下和実)

▼社会問題の分かち合い  
(毎月第三土曜日)  
日時: 11月16日(土曜日)  
13時~16時

場所: 教区本部  
内容: 原発・改憲・沖縄問題についての情報交換、その他